

医療小説

# 雪割草

京極 司

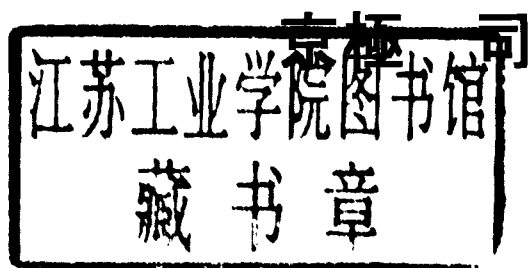


## 一向老期の生と性を赤裸々に描写一

「生きるということは、性に生きる」と言うことに他ならない  
人は性を若者至上主義にとらえ、老人と性を、高齢者と性を結  
つけようとしない。人間が生命を全うしようとすれば、性という  
性を持って生命を延ばさなければならない・・・そればかりか、  
(命)の終わりが近いことを知れば生命を、そして性を貪欲に貧  
うとしても何ら不思議ではない(本文より)

医療小説

# 雪割草



現代圖書

## 著者紹介

京極 司 (きょうごく つかさ)

日本大学教授 日本ペンクラブ他会員

### 主要著・訳書

『疎外論へのアプローチ』(ミネルヴァ書房)

『社会構造へのアプローチ』(P. ブラウ, 八千代出版)

『医療小説・禁断の手』(人間と歴史社)

『医療小説・老いのセクソロジー』(青山社) など

## 雪 割 草 (ゆきわりそう)

---

1997 年 9 月 15 日 第 1 刷発行

監訳者 京 極 司

発行者 池 上 淳

発行所 〒 229-1124 神奈川県相模原市田名 1 1 2 4 0

アメニティタワー 5 F

### 現代図書

TEL 0427-63-6442 (代) FAX 0427-63-6436

発売元 〒 112 東京都文京区大塚 3-21-10

### 星雲社

TEL 03-3947-1021 (代) FAX 03-3947-1617

印刷・製本 株式会社 ニューブック

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

Printed in Japan 1997

# 雪割草

## 目次

|                   |     |
|-------------------|-----|
| 性の選択 . . . . .    | 1   |
| 悲しみのナイフ . . . . . | 78  |
| 破局から . . . . .    | 152 |
| 解題にかえて . . . . .  | 192 |

## 性の選択

## 一

哲郎が三十五年におよぶ公務員生活を退職したのは、円高による景気の停滞が中小企業に色濃く出始めた時期であった。しかし、幸いなことに哲郎ら公務員には、こうした民間企業に吹く不景気風は無関係だった。

零細な民間企業に働く人間にしてみれば、「自分達の血税を……」と恨みの一つもいなくなるほどの退職金。加えて、退職時の給料の六〇パーセント近い年金が入る恵まれた生活が約束されていた。

しかも弟身分だったこともあって、十五年前に鎌倉の現在の家を購入する際に、父親の遺産分けという形で、早々と長男の義郎から資金援助を受けその支払いも終っていた。だから、住居のために退職金を当てるという必要もなかった。

その上、妻の八重も茶華道の教師として、彼女が自分の趣味を満足させるだけは得ていたから、そうした費用に自分の年金をあてる必要もなかった。それに今は二人いた娘達も大学を終え、相応の所に嫁し、また二世帯形式で同居する長男夫婦も某大手メーカーの主

任研究員として、安定した収入を得、将来に対し何の心配もなかった。だが、こうした恵まれた状況にもかかわらず、彼は退職する前にすでに話を決めていて、自宅から近い鎌倉駅前の「天藤薬局」の経理顧問として勤めに出了たのであった。それは金銭収入のためではなく、退職後の時間をどのように過ごせばいいのか、言うなら、のんびりと趣味を中心にした生活が出来ずに、その途を選んだのである。

そんな自分の姿をみてある哀れささえ感じた。が、それは自分だからというのではなく、大正の終わりから昭和の初期に生まれた、自分たち「働き蜂」と酷評された、日本人の平均的な姿のように思えるのである。それこそ西欧わけでも欧米に「追いつけ、追いこせ」と言った、背のびしていた頃の日本で、質素、儉約、忠孝の精神をたたき込まれ、馬車馬のように働くように教育され、またそれを当然のように受け止めてきた世代のもつ、悲しい宿命にも思えるのであった。

そんな人間達にとって、働ける身体で働かないで、たとえば趣味中心の日々を送ったとしたら、きつと怠者<sup>ナマケモノ</sup>として自己嫌悪感を抱くだろうと思った。いいやそれどころか最後には、その勤勉さが、戦後の日本を驚異的なスピードで再建し、今日の繁栄を支えてきたのだと、そんな自負さえ抱くのだった。

だからイギリス人が、ヨーロッパの人々が「働き蜂」だの、「エコノミック・アニマル」

だのと蔑み、「兎小屋」と冷笑しようとも、さして気にはならなかった。

こうした社会的事情もあって、哲郎は本当の意味での趣味というものを持つてはいなかった。

もっともゴルフや麻雀が出来ないというのではない。

上手とはいえないまでも人並みに打てたし、釣も山登りも一通りのことはこなしていた。だがそれは、「感興をさそう状態」としての趣味というものからは、遠くかけ離れたものであった。

それに三十有余年の公僕という職業的な制約が、彼自身の労働や趣味に対する考え方を極めて狭いものにしてしまった。

したがって、退職後に哲郎が思い切ってそれまでの「働きずくめ」の生活から、百八十多方向転換しようとしても、おいそれと簡単に変えることは出来なかった。

急激に生活や生活観を変えることに対する不安、違和感もあって、このようにまたしても働く所を求めて、結局今迄通り勤めに出ることになったのである。

ところが忘れもしないのはその二年後の六月のことである。

この年は、冷夏を予想している気象庁の予報官をあざ笑うように猛暑が続いていた。いつものように朝食を終え、彼が天藤薬局に出かけたのは九時を少し回っていた。

九時過ぎに家を出ても充分十時の開店には間に合った。

「じゃあ出かけてくるか……まったくもう、今日から一週間、経理の太田嬢はハワイに行くとかで、一人で大変なんだ、こっちは。いいな今の娘は。自分の都合で平気で休むんだから……それに会社の方もこれがまたからきしだめでき、結婚前の腰かけのつもりで入ってきて、それをどうとも言えないんだから。本当に、考えられないよ、僕達の世代の人間には……」

玄関先の「かまち」に腰をかけ、靴をはき終わると、哲郎は靴ベラを八重に渡ししながら愚痴ともとれるそんな言葉を吐いた。

「そうですね。でもねあなた、隆だって同じですわよ。この前のことですから。美華さんが具合が悪いからと言って、病院に一緒に行ったのはいいんですのよ。でもそのまま会社を休んだのですって、よ。後で聞いたら『中途半端になったから』と言うのですもの、大差ありませんわ、その女性と……。そこにいくと私達の世代はあなたがおっしゃる通りこう哀れと言うのか、自分や家族のことは、二の次、三の次と教え込まれて、またそうしてきたんですもの、今思うと」

八重は哲郎の話を聞き、同調するように言った。

「そうだよ、まったく。われわれは死ぬまでこうしてあくせく働くことになるんだろう



な、食えないわけでもないのにさ。考えたら損な巡り合わせだよ。そろそろのんびりしないとな、お互い年だし……じゃ、いつてくる」

哲郎は自嘲気味に言いのこし玄関を出た。

玄関先で、こうしていつものように哲郎を見送った八重は、それから急いで部屋の掃除を済ませた。そして一息ついてから、神楽坂で開かれる裏千家の師範たちの、「茶話会」に着て行くための着物を取ろうと二階に上がろうとした、その時であった。

くずれるように、突然その場にしゃがみ込んでしまったのである。

急な貧血のためと思われる。頭がふらつき、強い「めまい」を覚え、立ち上がるこゝさえ出来ない。

このところの暑さの所為<sup>サ</sup>か、胃が重く、ろくに食事を取らなかったことが多分原因と考えられる。しかし、どうもそればかりではないようにも思えた。食欲とともに、眠りもよくなかったのである。

こうしたことのために、最近は急激に体重も落ちていた。そして朝起きるのを、寒い冬ならともかく、爽やかな初夏のこの時期になっても難儀していたのだった。

もっともこうしたことは、心配させまいという配慮もあったが、今日のように具体的な形を幸いに取らなかったこともあって、夫・哲郎にも誰にも話してはいなかった。

八重はあれこれ思い当たる節を巡らしながら、ともかくめまいの治まるのを待った。それ以外、他にいい策を思いつかなかったこともある。

壁によりかかるようにして、めまいが治まるのを待っているところに、嫁の美華が子供の夏服を取りに降りてきたのである。

そんな美華をつかまえるように言った。

「美華さん、何だか頭がふらついて仕方がないのよ、私。……悪いけど、あなた簞笥の二段目に入っている、竹柄の絹の着物と帯取って来て下さらない」

「いいですわよ。でもどうなさったんですの、お義母さん、またこんなところで」  
気軽に美華はそう答え、座ったままで動こうとしない八重に心配そうに聞いた。

「いえね。どうって、大丈夫なのよ。だめね、私って……。ただね、このところの暑さで少しまいっているのだと思うの。めまいがして……病院に行くほどのことではないと思うわ、少し休めば」

八重は心配させまいとしてか無理に笑顔を作り、「大丈夫よ、本当に」と繰り返した。しかし美華には、逆にその不自然さが気になった。そして、心配ないと言う八重の額に手を当てた。

「そうですわね……お熱はなさそうですわ。でも、少しおやせになったのじゃありません

ん？ 何だか」

熱のないのを確認して言った。

「ね、いった通りでしょ。少し暑さにやられたのよ。要するにもう年だってことね、私も」

「そんなことはありませんわよ、お義母さんは。金丸聖三さん、ほら頭が少し薄くなつたとよく嘆いていらっしやる『湘南商事』の社長さん、ね。おっしゃってたけど、『お義母さん、若々しいな、いつも。女房と同じ年だと聞いたけど、十歳は若いよ。うちのかみさんにもお義母さんのようなしっとりとした色香があったらな。まったく旦那が、羨ましいかぎりだ。夜もきつとお盛んなんでしょね』って。いやらしいけど、私にそんなことを社長さんが。……でも、私もお若いなって思いますの、お義母さん」

美華は、湘南商事を息子に譲り、今は別段することもなく、暇をもてあまし、暇潰しのつもりで教室に入ってきたという、赤ら顔で見るからに好色漢を思わす、金丸聖三の話を持ち出した。

「金丸さんが、そんなことをあなたにまでね……そうなの、よくあの方、私にもおっしゃるのよ。夜もお盛んなんでしょねとか、何とか……だからね、『こんなおばあさんでよろしかったら、是非楽しい思いをさせていただきたいですわ、私……』そう言って、笑っ

八重は美華の手前もあってそのようにとぼけはした。

たしかに個人差があつて五十前に閉経の女性もいる。が、今は八重のように五十過ぎて生理のある女性が多いのは事実であつた。むろん生理の有無それ自体は、子供が出来るか否かであつて、性生活の有無と関係がないといえはそうである。しかし、いくらそうはいつでも、それは女性であることの一つのバロメーターである。その有無が性に対しての、本人の精神的・肉体的な面に大きく影響することは否定できない。

ただ八重の場合、この数ヶ月は体調がこんなわけですぐれないこともあつて、性の営み、その回数が減つてはいた。しかし、金丸聖三がこうした好色な勘繰りを入れるほど、いまだに八重に「女としての性的な魅力」が健在だつたことは確かだつた。

そんなたわいのない話をしながら様子をみていた八重だが、再び立ち上がつて着物に着替えようとした。しかし、またしても何かに押されたようにふらふらとよろけ、茶棚にもたれかかるようにその場にしゃがみ込んでしまつたのである。

「大丈夫ですか？ やはり無理なさらない方が……ねえ、お義母さん、大丈夫ですよ」  
美華は八重がよろけるのを反射的に支える一方で、心配そうに声をかけた。が、八重はこの間一言「美華さん、私……」そう言つただけで、しばらく顔を上げようとはしなかつ

た。できなかったものと思われる。苦しうに大きく肩で息をつくだけだった。

「お義母さん。お義母さん、大丈夫ですよの……」

八重のこの様子に、美華の動きもそれまでの比較的余裕をもった対応から、急迫した対応・言葉に変わっていた。

そんな美華の焦った動作・行為が八重に伝わらないはずがなかったが、八重は一向に立ち上がる気配を見せない。茶棚にじっともたれかかったままである。

この間に、八重の内面の心機能には大きな変化が起こっていたと思われる。

顔面は蒼白となり、時々苦しうに「うっう……」と身体をよじった。

急激に心臓に何らかの負担がかかっているのであらう。そのために声を出すことも出来ず、顔面の血の気が失せているものに違いない。そんな急迫した状態が何分程続いたであらうか。恐らくは数分であつたろうが、実に長い時間に美華には思えた。心悸圧迫もどうやらおさまったと思われる。心配そうにじつとのぞき込んで声をかけている彼女を見上げるようにして、申し訳なさそうに言った。

「本当、ご免なさいね、心配かけて、あなたにまで私ったら……」

「いいえ、そんなことは、お義母さん……でもどうなさったんですの、急に？」

「私にも何がなんだか……急にこう、ふらっときてそのまま……」

「……」

美華は黙って八重の変化を見守った。

「ところで美華さん。どうも私、行けそうにないわ、こんなことでは今日は」

しだいに言葉にも落ち着きがもどり始めていた。そんな八重に、ホッとするように美華は言った。

「いったいどうなさったんですの、お義母さん、また。……心配しましたわ、私。いくら声をかけても、返事がないんですもの。驚きました、どうなることかと……どうなさったのですの？ 本当に、急に」

突然の八重の姿に、嫁の美華の動揺は想像以上に大きかったようである。

人一倍デリケートな心をもっている美華ではあった。しかし、それにしても余り突然のことと、ただおろおろと声をかける以外、しばらくなす策を失ったままだった。だが八重のそうした落ち着きに比例して、彼女にも次に取るべき行為を考える余裕が生まれていた。美華は、八重を静かに抱きかかえるようにして寝室へと運んだ。

「お義母さん、私、これから例会の方と『黒沢院長』に電話を入れておきますわ。ですから、このまま安静にして静かに休んで下さいね。……きつと暑さで、お疲れになっただけですわよ」

「ありがとう、美華さん。そうさせて頂くわ。暑さにやられたのね、どうやら」

「そうですわよ、きっと。安心して休んで下さい。私があとは……」

美華は、八重が今少し落ち着くのを待って、電話口へと立った。

幸いに六月というこの時期は、企業や学校の春の健康診断も終わり、また夏風邪などの患者の多い時期もはズレていた。

このため、美華の電話にも心よく応じてすぐに往診に来てくれた。

二十歳程の看護婦を一人連れ、自分で運転してやってきた医学博士をもつこの黒沢彰一と言う五十過ぎの院長は、一通りの診察を終え聴診器を丸めながら言った。

「この暑さで少し身体がまいったのですな。大した事ありません、奥さん。ぐっすり眠れるように注射しておきましたから、すぐ楽になると思いますよ」

「ありがとうございます、院長<sup>センセイ</sup>。暑さで……そうでしたの、やはり。私もそうじゃないかとは思いましたの。でもひょっとしてって」

美華は診察結果に安心したようにそう言って、手洗いの水を院長のかたわらに置き直した。

白髪の入った黒沢院長は、美華の置いた手洗用の水で、洗うというよりも二、三度じゃぶじゃぶとすくった。「烏の行水」と言われる、そんな簡単な洗い方である。それから数

回、水切りのため容器の上で手を上下に振った。

「薬をあとで取りに来て下さい、いいですね」

「はい、院長<sup>センセイ</sup>」

美華はそう返事し、院長が水を切り終わるのを見計らって真新しいタオルを差し出した。差し出されたタオルで手をふきながら、院長はしばらく考えるように黙っていた。が、帰りぎわに一言付け加えた。

「むろん今も言いましたように、この暑さで身体がまいつているだけで、まずご心配はないとは思いますがね……でも、少し気分が落ち着きましたら思いきってこの機会に、幸い今はどこの病院も暇ですから、精密検査を受けられるのもいいんじゃないかと思えますよ、万一を考えてね。それに最近は食欲もないということですし……もしその気になられたらいつでも紹介状を書いて差し上げますから、その方の検査もお受けになるにこしたことはないと思います、私は。どこでもゆっくり時間を取って、詳しくあれこれと検査もできると思います、今なら」

「そうですわね、院長<sup>センセイ</sup>。このところのお義母さんたら、食欲がないとおっしゃって、ほとんど食事らしいものをとってらっしゃいませんし……ですから私もそう思いますわ、是非。それにいくら若くお見えになるとはいっても、五十は出てらっしゃるんですもの。一



度ゆっくり検査なされた方が、ね。……私からもお勧めしますわ、それを。それにね、お義母さん、今は検査と言っても簡単らしいですわよね、院長」

美華は今回のことで一層そう思ったものか強く検査を勧めた。

「まあ昔に比べたらそのようにもいえますか、ね。たしかに今はまだどこが悪いというわけではないのですが、でもそんなご様子ならその方がいいですな、ぜひこの機会に」

院長も美華に合わせた。

「いやですわよ、私は。……ただの貧血ですって、院長。院長もさつき暑さでまいっていただけだと、そうおっしゃったじゃありませんの。それに美華さんまでも、また私を病人にして」

八重は不服そうに二人の会話にそう返事した。

注射がそんなに早くきいてくるとは思えないが、幾分院長が来た時に比べれば顔色にも赤味がさし落ち着きが出ていた。

「でしようがね、お義母さん。そうなされた方が……。院長もせっかくご親切にああおっしゃって下さっているのですし……すいている時の方がいいですわよ、同じ検査だって」「まあ軽い気持ちで……そう身体を休めるつもりで行かれたらいい、一度。帰ったら城南大学の榊原教授に紹介書を書いておきましょう、すぐにでも。薬を取りに来られた時、